

## 4 モラエス関係

### 4-1

#### モラエスの「風土」～ハーンとの親和性～

宮崎 隆義

##### 序

徳島で16年過ごし、生涯を終えたポルトガル人ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーザ・モラエス(Wenceslau José de Sousa Moraes, 1854-1929)は、リスボンの官吏の家系に生まれ、母親の気質を受け継ぎ繊細で文学的な素質を持ちながらもポルトガル海軍軍人として経歴を重ね、やがて上級士官となった。幾度となくアフリカ大陸を周回する航海やアメリカへの航海を重ね、やがてポルトガルの植民地であったマカオに赴任する。そこで亜珍（アチャン）を妻として迎えふたりの息子をもうけている。ポルトガル海軍の司令で、日本に武器調達を目的にやって来たのが1889年、初めて長崎の地に足を下ろした。来日前から、東洋、特に日本に強い関心を抱いていたらしいことがうかがえるが、その後日本に住み、日本で生涯を終えたモラエスのその生き方、そしてモラエスの日本に対する見方と思いは、現在の混沌とした非グローバルの状況にある世界を考える意味で、そしてその中に置かれている日本を考える意味で大きな示唆を与えてくれるに違いない。また、彼の目を通して描かれた当時の「徳島」が、旅人や訪問者ではなく、庶民の生活を送った生活者の目でみた「徳島」であることを再確認する必要がある。生活者として、五感を通しての「徳島」は、後に『風土』（1935）を書いた和辻哲郎（1889-1960）に通ずるものがある。

和辻哲郎は、東京大学在学中にラファエル・フォン・ケーベル（Raphael von Koeber, 1848-1923）を尊敬し夏目漱石などとともに教えを受けているが、そのケーベルが教鞭を取っていた時期1893年から1914年には、ラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904）も東京大学で教鞭を取っていた。そのハーンをモラエスが尊敬していたのは、歴史の偶然のような感があるが、ハーン、後に帰化し小泉八雲と名乗ったハーンは、アメリカのシカゴで開かれた万国博覧会で日本に対する興味を抱き、やがて来日し、ジャーナリストから教員生活を送り、やがて日本の紹介だけでなく、日本の昔話の採話・再話を行った。

ハーンとモラエスとの直接の接点はないが、モラエスよりもわずかに先輩格に当たり、旺盛な著作を残したハーンに対して、モラエスは同時代人として、その文才と著作に対して大きな敬意を払っている。そのせいか、モラエスの著作は、ハーンの著作を真似たよう

な感がある。しかしながら、ハーンの著作が、日本の説話、聞き語り物語の採話から再話へと転換したものに大きな特徴があるのに対して、モラエスは、ハーンをお手本に真似をしながらも、小説、物語といった虚構の物語には距離を置き、日本の日記文学、随想文学に目を向けて、随想記を書くことに専念している。モラエスがハーンとは違い、随想文学、日記文学に向いたその理由は定かでないにしても、興味深いのは、モラエスとハーンがそれぞれ別々の形式を追求しながらも、過去、記憶にこだわり、その記憶を基にして現実の世界を眺めているということであろう。それが、五感を研ぎ澄まして捉えた世界、見えるもの、聞こえるもの、匂い、触ったもの、味わったものなどを通して捉えた世界であり、ふたりに直接の接点がないにも関わらず奇しくも和辻哲郎が「風土」として世界を捉えようとしたものに通じ合っているのである。

## 1. 長崎へ

モラエスは、1889年8月4日に、マカオから各地を経由し東シナ海を横断して長崎港に入港した。その時初めてみた長崎の風景に対して、彼は次のような感慨を姉エミリアに書き送っている。

ぼくはすばらしい国、日本にいる。ここ長崎で世界に比類のないこれらの木々の陰で余生を送れたらと思う。・・・だが。みごとな景色、花々、ほほえみにみちた、神によって祝福されたこの土地をおもいを残して去るよ。魂が甘美な思考にふけるようにと、そして生活に疲れた精神がなお浄化されて神慮に対し感謝を捧げることのできるようにとつくられたこの土地を」(1889年8月13日、エミリア宛)<sup>1</sup>

モラエスのこの手紙には、憧れていた日本を直接に自分の目で見た感動が込められているが、それはモラエスが日本に来る前に間接的にまた断片的に見ていたものの確認でもある。ちょうど我々が、観光パンフレットの写真を見て旅先に思いを馳せ、自分の目で確認することと同じであろう。そして、その時に目の前に広がる全景のものが、絵葉書や観光パンフレットの写真のように、断片的な「風景」として切り取られることになる。モラエスと生年が同じイギリスのオスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) は、「自然が芸術を模倣する」(‘Nature imitates Art’, *The Decay of Lying*, 1891) という逆説の言葉を残しているが、ワイルドが端的に示したその一瞬の転換によって、見慣れた全景が「異化」され美しい「風景」、「景色」となるのである。

モラエスが、長崎の風景や日本の風景をどこで何を介在として見ていたのかは興味深いですが、次の文章が手掛かりとなっている。

---

<sup>1</sup> 岡村多希子『モラエス―サウダーデの旅人』(モラエス会, 2008年), pp.552-53. 本論では、岡村多希子訳と花野富蔵訳を、訳文の紹介も兼ねてそれぞれ参照している。

知らない者は大尉が言ったことをほんとうにするかもしれない。とにかく、文書で書いてあったり、ヨーロッパにまで渡来している陶器や屏風の時代錯誤の図柄で見たりで、珍奇に、ふつう空想化されている日本、幻想的な風景の国、さくらの国、美人の国、軽はずみな恋の国といったような国は、世界主義が独特の性質を剥奪してしまっている大商業都市の神戸、横浜や外交の中心地、東京でさえいまではなくなっているが、人口のあまり多くない生粋に日本的なこの長崎では、まだ残存している。自然の景勝がそうした日本的な魅力を身につけて、重畳とした杉林の山なみに狭ばまった港湾は、旅行者の目をうばう最も美しい景色のひとつでもある。(花野富蔵『定本モラエス全集 I』, p. 104)

ここにある「文書で書いてあったり、ヨーロッパにまで渡来している陶器や屏風の時代錯誤の図柄」から推測すると、モラエスが読んだと思われるピエール・ロチ (Pierre Loti, 1850-1923) の著作、あるいはシーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866) の著作が想像される。ピエール・ロチの作品については、この文章が含まれている「日本の追慕」の中に言及もあることから疑うべくもないが、シーボルトの著作については、時代的なことを考えれば可能性として考えることはできる。また、「ヨーロッパにまで渡来している陶器や屏風」についても、ポルトガルと日本との交易は種子島に鉄砲が伝来されて以来のことであることから陶器や屏風などは早くから伝わっているだけでなく、陶器が当時も日本の国策として盛んに輸出されていたという事実があるし、また「屏風」が「ビョンボ」(biombo) としてポルトガル語に移入されていることを考えれば、モラエスも早くから日本的なものを見ていたということは十分に推測できる。だが、モラエスが見たと思われる「時代錯誤の図柄」から浮かんでくる日本の姿は「珍奇に、ふつう空想化されている日本、幻想的な風景の国、さくらの国、美人の国、軽はずみな恋の国といったような国」であって、おそらくモラエスも違和感を感じていたことであろう。

シーボルトの著作『日本』(NIPPON, 1832-1882) とそこに含まれている絵図は、福岡県立図書館のデジタルライブラリーで確認できるが<sup>2</sup>, その絵図からうかがえる長崎の風景は、モラエスが言葉で描いているものと大差はない。

まず最初に水平線にくっきりと見えたのは、みごとな長崎湾に隣接する山々と緑の島々であった<sup>3</sup>。

さらに、長崎には、ポルトガル人にとっていまひとつの興味がある。僕らと太陽の子孫たちの関係、最初のヨーロッパ人航海者の栄光を僕らに与えた海の迷路での関係をいっそう親密にしたのは、この長崎の土地だった。ルジタニア (昔のポルトガル)

<sup>2</sup> <http://www.lib.pref.fukuoka.jp/hp/gallery/kityoindex.html#select2>  
<http://www.lib.pref.fukuoka.jp/hp/gallery/nippon/hg/n1-9.html>

<sup>3</sup> 岡村多希子『モラエス―サウダーデの旅人』(モラエス会, 2008年), p.54.

の宣教師の言葉がキリスト教の教理を根深くおろせたのもこの地だった。その後、ポルトガル人に懷いた憎悪，熱烈な聖シャヴィエル上人のいく千とも知れない弟子に懷いた憎悪が激しく燃えさかったのもこの地だった。船がこの港に近づくと，こんもり茂った杉林がけわしい断崖になって海岸につきでている絵のようなパーペンブルグ島を指呼の間に望めるだろう。そここそは，かつて徳川幕府の隠密の全キリシタン虐殺から身を避けて脱走してきた者，おびたしいキリシタン宗徒を海中に突き落としたところである<sup>4</sup>。

モラエスの文章で興味深いのは，現実に目の前に開けた風景に対して，彼がさまざまな書物から仕入れた知識，いわば過去の姿を重ね合わせている点である。『極東遊記』に収められた「日本の追憶」というタイトルからも，彼が書き残しているのは，記憶のフィルターを通して回顧された風景であるということになる。後を書くことになる『徳島の盆踊り』や『おヨネとコハル』も随想記なのであって，時間の隔たりを介在させた追憶，記憶の断片の集成なのである。

モラエスは，長崎から瀬戸内海を通り，神戸を経て横浜に向かったが，長崎から横浜までの航海を次のように記している。

長崎を出ると，船は下関海峡を航行し，不意に現れる樂園のような風景がこの地球の一隅の現実の形というよりも幻影のように思われる，イギリス人がインランド・シーと呼んでいる比類なく美しいその内海に入った。そして，すばやく神戸の港に停泊し，横浜湾に停泊し，ただちに陰鬱な中国の岸边に帰った<sup>5</sup>。

モラエスは海軍軍人であるから，およそ航海に必要な情報は十分に集めていたことは常識的に考えても推測できるが，ここで「イギリス人がインランド・シーと呼んでいる」という言葉からうかがえるのは，彼が，イギリス人，イギリス海軍が作成した日本の瀬戸内海の海図を見ていたということである。また，瀬戸内海が，イギリス人によって英語圏では当時既に「インランド・シー」と既に呼ばれていたことも知ることができる。海図であるが故に，航海に必要な海の深度も極めて正確に記されていたに違いない。

モラエスが長崎にやって来た 1889 年といえど，日本が開国し明治となってまだ 20 年ほどしか経っていないということになるが，そのときにはもう既にほぼ日本全体が海図の制作によって詳細に調べられていたということも推測できよう。そうした情報を，モラエスは海軍軍人として早くに収集していたことがうかがえるのである。モラエスの文章では，いかにも異国情緒に溢れた樂園の描写の体をなしているが，その裏には海軍軍人としてのまなざしが透けて見えている。長崎の地理的な特徴には，天然の良港，軍事的にも極めて

<sup>4</sup> 花野富蔵『定本モラエス全集 I』「極東遊記」（集英社，1969 年），pp.104-105.

<sup>5</sup> 岡村多希子『モラエス―サウダーデの旅人』（モラエス会，2008 年），p.54.

優れた港としての長崎の姿が浮かび上がっている。それは、シーボルトが描いた長崎の風景とはほぼ一致しているといっても過言ではあるまい。むしろ、モラエスはシーボルトの『日本』を見た記憶を通して長崎の港、その風景を眺めていたのかもしれない。

初めての日本、長崎に降り立ったモラエスは、その時に味わった経験を『極東遊記』の「日本の追慕」に鮮やかに記している。

十二日間滞在したこの時の長崎の思い出を彼は『極東遊記』の1編「日本の追憶」にいきいきと綴っている。燃えるように暑い夏の日の午後、毎日のように彼は仲間のひとりとともに小高い丘に位置する諏訪神社を訪れる。涼やかな神社の楠の木陰にあるチャヤの縁台に寝そべると、やがてラムネや苦い日本茶、カステラ、煙草、煙管が運ばれてくる。いつも同じふたりの若い女中がサービスをし、客たちとともに笑い、客たちのコップで飲み、客たちの煙管で吸い、客たちの菓子を食べる。日本ではじめて知り合ったこれらの素朴な女たちから、彼らは最初の日本語単語、最初の日本の風習を教わる。ビスケットでできた人形のように小さい、しとやかな、キモノを着た、素足に草履ばきの日本のムスメたち、いよいよ長崎を去るとき彼女たちがどんなに名残をおしんでくれたことか！<sup>6</sup>

原文訳では長くなるので、簡潔にまとめられた岡村多希子氏の文章で紹介したが、長崎滞在時に味わった暑さ、風景、匂い、煙草、茶の味や菓子の味などが、追憶として、時間のフィルターを通し、記憶の断片として紹介されているのである。ここには、いわゆる五感を通してその場の空気だけでなく、日本のささやかな風習をそのまま受け入れようとしている様子もうかがえる。風習は、その土地に過去から連綿と続く記憶が形を得たものであり、モラエスはその記憶をさらに自分の記憶に内在化させて「追憶」としているのである。

モラエスのこうした傾向は、ラフカディオ・ハーンと非常に似ている。例えば、ハーンが隠岐を訪問したその見聞記や随想は、隠岐の景色ばかりでなく、微細な目で穿つように眺めた地勢、そしてその空気、匂い、そして、ハーンに特徴的な音が交えてある<sup>7</sup>。ハーンの著作のうち、見聞録のものは、そのままといってよいほどモラエスの著作のお手本となっているが、ハーンが本質的に目指していたものは、「採話」でありその「再話」であったろう。

和辻哲郎は、その『風土』の中で、「風土」というものを定義して次のように述べている。

ここに風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。それは古くは水土とも言われている。人間の環境としての自然を地水火風と

<sup>6</sup> 岡村多希子『モラエス―サウダーデの旅人』（モラエス会、2008年）、p.53.

<sup>7</sup> 小泉八雲、平川祐弘編『明治日本の面影』（講談社学術文庫、1990年）の各編が参考になる。

して把握した古代の自然観がこれらの概念の背後にひそんでいるのであろう。しかしそれを「自然」として問題とせず「風土」として考察しようとするには相当の理由がある。それを明らかにするために我々はまず風土の現象を明らかにしておかなくてはならぬ<sup>8</sup>。

和辻は、さらに「風土」を人間存在のひとつの規定として説くために、「個であるとともに全であるごとき人間存在の根本構造」として、「空間性・時間性」を提唱している。ここに「時間性」を持ち込んでいるのが、和辻の「風土」論の本質であるが、それを、ハーンはその著作において体現しているのである。昔話の発掘、「採話」と「再話」はまさに「時間性」の最たるものであろう。

原田照史は、和辻とハーンとの発想の親近性に触れて、和辻美学の先駆者たちとしてハーンをそのひとりに置いている。原田によれば、ハーンの「やさしさ」(tenderness)が和辻にあっては人と人との「間柄」、人間的な「いつくしみ」であると見なしている<sup>9</sup>。この点からモラエスを考えてみると、彼が『おヨネとコハル』の冒頭に掲げたピエール・ロチの引用にある「あわれみ」であって、モラエスの眼差しの根底にある「あわれみ」を通して、ハーンの「やさしさ」、そして和辻の「いつくしみ」に繋がっているのである<sup>10</sup>。

## 2. 徳島へ

モラエスは、1916年7月4日に徳島にやって来て、その後亡くなるまで徳島に住み続けた。モラエスが、徳島の地をどのような目で見ていたかについては、これまでも論じてきたが<sup>11</sup>、さらに視点を少し変えてみると、モラエスが、地方都市である徳島とそこに住む人々、その風景を、西洋化がまだなされていない古くからの風景として、つまりは歴史を湛えた風景、空間だけでなく時間の中の風景として眺めていることがわかる。しかも実際に四軒長屋に庶民としての生活を送り、その土地の空気を吸い、匂いを嗅ぎ、庶民の食べ物を長屋に住みながら食べるということが、徳島の「風土」を、身をもって知ろうとするモラエスの姿勢を示している。

徳島にやって来た時の第一印象は、モラエスが長崎に初めてやって来た時の印象と大きく変わるものではなかったが、モラエスは、降り立った徳島の地で、視覚、嗅覚を最大に研ぎ澄まして風景を感じ取っている。

夏の晴れた日の午後—正確に言うと、一九一三年七月四日の午後—船を下りて、私のために用意されていたごくささやかな住所に歩いて行ったときに受けた徳島の第一

<sup>8</sup> 和辻哲郎『和辻哲郎全集 第八巻』（岩波書店、1989年）、p. 7.

<sup>9</sup> 原田照史「和辻美学の先駆者達—ハーン、ニーチェ、ワーグナー—」『和辻哲郎全集 月報8』、pp.4-8.

<sup>10</sup> 「未来の文学はあわれみの文学であろう」、モラエス、岡村多希子訳『おヨネとコハル』では「あわれみ」を「敬愛」と訳されているが、原文の‘piedade’の意味に近い「あわれみ」としておく。

<sup>11</sup> 拙論、「モラエスの徳島(1)～(5)」『地域科学研究』（徳島大学総合科学部）、第1～5巻。

印象は、これ緑・・・・という圧倒的な、だが快い印象であった！陶酔した瞳の中にどっと入り込む緑。ふるえる鼻孔にどっと流れこむ緑。緑、緑、緑一色！・・・何ひとつ考えることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう。(59-60)<sup>12</sup>

旅に疲れ、病気でいささか衰弱してゆっくりゆっくり歩いてゆく二軒屋の長い道沿いの左手に、家並を見下ろすように、一面草のビロードにおおわれた、松の影濃い美しい山がもったいぶった様子で聳えている。そして、その山と近くの田畑から繁茂する植物のいがらっぽいにおいが鋭く私の鼻をつく。創造者、変容者としての永遠の営みにいそしむ母なる自然から発散する生の神秘的発酵物の香気のように。緑、緑、緑一色！・・・ (60-61)

激しく眩惑するかのように不意に襲ったこの緑の印象は、しかしながら先述のごとく、快いものであった、なぜなら、今思うに、私の弱り切った精神とは決定的に相容れないことがかねてよりはっきりしていた文明化された大都会での生活、偽りの外観で飾ったその洗練された生活の苦味とはまったく無縁の田園の簡素な風景を前にして、私は独立、自由、平安の無言の暗示によって純化されていたからである。 (64)

上の文中、下線で示した部分でわかるように、モラエスは五感のすべてを通して徳島の風景を眺めている。同時に、その土地の伝統に言及することによって、時間の流れの中で、昔の面影や風習を残す徳島と、近代化し欧米化する他の都市を相対化しているのである。

私のいる徳島は、大阪・神戸といった大都会からさほど遠くない四国の島の海岸の穏やかな町である。しかし、町の人たちは、すべての島国の人がたいていそうであるように、自分たちの風習に関してひどく保守的で、岩場の牡蠣のように伝統にしがみついている。 (22)

日本各地には、その土地の伝統や、その土地でのしきたりや習慣などが現代でも根強く残っている。方言や風習、習慣はもちろん、食べ物やその味などは、たとえ居住地が変わろうともなかなか変わらないものである。それは当たり前といえば当たり前のことであるが、それが「ひどく保守的で」「伝統にしがみついている」ということには、時間の流れとすることがその根底にある。その時間の流れを含み込んだものが、和辻が後に説いた「風土」であると言ってもよかろう。五感によって把握した空間性が、伝統に目を向けることによって時間性を帯びてくるのである。

---

<sup>12</sup> ヴェンセスラウ・デ・モラエス、岡村多希子訳『徳島の盆踊り』（ことのは文庫、徳島：徳島県立文学書道館、2010年）。以降、括弧書きで頁を示す。

いわゆる文化とか伝統という言葉は、すこぶる抽象的で複雑多岐にわたるものであって、一言で捉えることができないものであろう。だが、それらは時間の流れの中で生まれ、時代を超えて連綿と繋げられたものである。モラエスが指摘している「伝統」(tradições)<sup>13</sup>はそうした連綿と続く複雑多岐にわたるものであって、それを知るということは、ただ見て観察するだけでなく実際に日常の生活を送り、土地の人と同じ空気を吸い、同じ匂いを嗅ぎ、同じものを食べてみるということしかあるまい。そうして、その土地の人々と同じ時間の流れの中に身を置くことであって、モラエスが目指したものはそういうものであろう。

モラエスは、『徳島の盆踊り』において、海軍軍人としての目で徳島の概観を、その地形や地勢、町の様子を正確に捉えている。長崎入港の様子についての記述は、詩的な捉え方でその美しさに感嘆しながらも、地形の特徴など、海軍軍人のまなざしがうかがえるものでもある。その後、瀬戸内海を航海して神戸に到着するが、その瀬戸内海の風景の美しさを日本的な美しさとして捉えつつも、同じように海軍軍人としての目でその地形や地勢を眺めているのである。徳島にやって来て、徳島の概観を述べながら、実は、軍人の目でも徳島を眺めている。徳島城址のある城山と、その周辺に広がる街区のそれぞれの役割り、河川の様子、網状に広がる水路や運河らしきものの様子、そしてそうしたものが封建時代の昔から今も色濃く残っているとして、海軍軍人としての目で地形の把握、地勢の掌握をしているのである。

### 3. モラエスとハーン

モラエスの『徳島の盆踊り』(*O "Bon-odori, em Tokushima (Caderno de impressões íntimas)*, 1916) は、日記の体裁を取ったほぼ一年に渡る徳島の生活の記録でありながらも副題にあるように「印象記」である。その印象というものが、モラエスが直接に目で見えたもの、「風景」や生活の事物を、時間を隔てての記憶や回想に結びつけたもの、時間の流れの中で相対化されたものであることを考えれば、ハーンの、「採話」という作業によって過去の物語を掘り起こし、「再話」という行為と同様に、現在の時空間に過去を内在化させるということである。それが「印象」として感情を動かし、読む者に対して共感と呼ぶこととなる。モラエスが『おヨネとコハル』の冒頭にエピグラムとして掲げたピエール・ロチの言葉にある「あわれみ」は、「印象」が過去の記憶を呼び覚まして「共感」を動かし、醸成するものであるとあってよかろう。モラエスは、『徳島の盆踊り』の中で、小説という虚構の形式を否定して、日本の平安期の日記や随筆を取り上げ、その形式に大きく傾倒していることを述べているが<sup>14</sup>、それは、ハーンを尊敬し心酔し、お手本として真似ながらも、ハーンの文学には叶わぬとの思いがあったのかもしれない。

これまでモラエスとハーンについては、ふたりの同時代性やその経歴の類似、そしてモラエスのハーンに対する深い尊敬と心酔という観点で比較されているが、和辻哲郎の「風

<sup>13</sup> W. de Moraes, *O "Bon-odori, em Tokushima (Caderno de impressões íntimas)*. PORTO:LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916, p. 6.

<sup>14</sup> 『徳島の盆踊り』, pp. 28-30.



土」という捉え方の根底にある「空間性」と「時間性」から両者の著述の方法を考えると、モラエスが単にハーンに追随したというだけでなく、むしろ、日記や随想という形式によって、読者の埋もれた記憶を呼び覚まし、共感から「あわれみ」へと昇華させることを行っていたといえる。その点では、ロマン主義の傾向を帯びた時代に生き、ハーンと類似した生涯を送りながらも、根底にある本質を受け継いで独自の境地を打ち立てようとしたとみなすことができるかもしれない。

参考文献：

ヴェンセスラウ・デ・モラエス，岡村多希子訳『徳島の盆踊り』，徳島県立文学書道館（ここのは文庫），2010 年．

岡村多希子『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』，彩流社，2000 年．

小泉八雲，平川祐弘編『明治日本の面影』，講談社学術文庫，1990 年．

花野富蔵『定本モラエス全集 I』，集英社，1969 年．

和辻哲郎『和辻哲郎全集 第八巻』，岩波書店，1989 年．

Moraes, Wenceslau José de Sousa, *O "Bon-odori,, em Tokushima (Caderno de impressões intimas)*  
LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916.

\_\_\_\_\_, *Ó-Yoné e Ko-Haru*, EDIÇÃO DE A «RENASCENÇA PORTUGUESA», PORTO,  
1923.